
MAD LOVE IN MIDNIGHT

サンソン 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A D L O V E I N M I D N I G H T

【Nコード】

N 9 1 6 6 K

【作者名】

サンソン 琢磨

【あらすじ】

ある晩。良家のお嬢様、秋富士恵美は元彼の隆史から二度目の別れを告げられた。惚れた隆史の顔に免じて一度は身をひいたものの、やっぱり納得出来ない。貴方にとって私は一番なのよ！と、いうわけが始まった、良家のお嬢様の我が儘一直線！！

発端（前書き）

ネガなテンションを集めて書いてゆく物ですので、お読みしている最中に気分を悪くされた方は、ごめんなさい。

この書き物を、人体切断やスプラッターが好きな方々に捧ぐ。

発端

「俺と、今日限りできつちりと別れてほしい」

「え？　ど……どういう、こと……？」

夜。

秋富士家の道場には、この家の長女の恵美と、その元・彼氏の御蔵隆史がいた。そして、たった今、隆史から“二度目の”別れを告げられたところである。これには目を剥いて驚く恵美。

「ねえ、なぜ、貴方と私が別れなければならないの？　嫌っ……。何を云っているのか解らない……」

道着袴姿の恵美が頭を横に振るなりに、身を退きながら口元を隠してのけぞった。解らないとか云いつつも、その意味が解っているようで、女は認めたくないのであろう。しかし、隆史から別れを切り出されるということは、幾分か恵美に原因がある筈だ。

「解らないって、その顔はお前……。意味解っているじゃねえか。」

——ああ、はつきり云ってやるよ。金輪際、お前とは付き合わない。そういうことだ」

「なんで？　なんで？　なんで？　どうして？　どうして？　どうして？　——ねえ、どうして金輪際、隆史さんと逢っちゃいけないの！？」

歯を剥いて強く突っ込む男に対して、恵美はさらに身を乗り出して問いただしてきた。

「人から云われないと解らないのかよ。——あんな、お前、鬱陶しいんだよ。この前なんか、俺が美智恵うっちえといえることを知っていて押し入ってきただろーが」

「ああ。あれは、貴方の今の彼女さんにご挨拶しただけよ」

なあんだ、あのことね。と、いう風な顔をして胸元で手のひらをぴしゃりと景気よく鳴らしたのだ。

これが隆史を怒らせた。

「だから、そーやってつきまとってんじゃねーよ！俺は、前もこうして別れてくれって云いに来ただろ。お前と終わりつつたら、終わりだ！」

声を荒げたのちに、床から膝を上げて道場から出てゆく。恵美は慌てて立ち上がり、男を呼び止めた。

「た……隆史さん、ちょっと待って！」

「待たない。じゃあな」

そう吐き捨てた隆史が、恵美に背を向けて足を進めていった。

どうして、このように成ったのか。事態の鍵は、この女、秋富士恵美にありそうである。

出逢い

数年前の秋口。

それは、長崎県私立九十九島大学の中での出来事。当時、大学三年生だった御藏隆史は、昼休みにキャンパスを歩いていたところで、三人のうちその先頭をゆく並外れて美しいひとりの女とすれ違った。それが、秋富士恵美であり、その時期の大学内で羨望されていた『キャンパスの三大マドンナ』と云われていた内のひとりだった。まさに高嶺の花だった女に、隆史はその日に限ってなぜだか一目惚れをしてしまい、翌日の昼休みを狙って話しかけてみたのである。そう、最終的に付き合ってほしいと声をかけたのは、恵美からではなく隆史の方からだった。

いままで男に対して免疫がなかったために、小中高と通ってきた学生生活から風向きが一変したものだ。隆史はこれに戸惑いを隠しきれず、隆史の申し出を跳ね返すことなく受け入れた。恵美には同性の友達や知人は出来ていたのだが、異性からは——つまりは男たちに至ってはそうでもなかった。

高嶺の花だからではない。

むしろ、遠ざけられていた。

そして、同性の知人たちからも距離を置かれていたのだ。

この大学に入るまで恵美を知らなかった隆史。二十歳を過ぎた今まで、異性から敬遠されて男といったモノに免疫が無かった恵美。急接近に至るまでの時間は、当然のように短かった。

交際を始めて僅かで、恵美は隆史へと処女を捧げ。それから熱い夜を繰り返す、すごしていった。

『クラブ 月光華』

それから月日が経ち、恵美と隆史は大学を無事に卒業したのちに、二人はそれぞれ就職をして会社で勤めていきながらも、交際は続いていた。そして、恵美が隆史の賃貸住宅へと押しかけるようなかたちをとり、同棲生活が始まっていく。

それから隆史は、大学時代の同級生やバイト仲間などの付き合いから、週末には合コンと歓楽街へと出掛けるようになっていった。このような彼に対して、恵美は意外なほどに寛容を示していたのだ。

さらに日が経った週末の夜。

隆史はいつものように、大学からの友達の木田恒昭と佐渡晴之の二人と連んで、長崎市内の歓楽街である思案橋に建つ飲み屋『クラブ 月光華』へと来ていた。店内の一角を陣取って、男たちは皆、お気に入りのホステスを指名してそれぞれの隣りに座らせている。ここのクラブは市内に数ある中でも、全体的にホステスの質が高いところで有名。よって当然のごとく、隆史にもお気に入りがあったので、指名していた。源氏名はナホ。腰まである髪の毛をキレイなまでに脱色している、ちょっと猫っぽい女。太ももが見えるほどに大胆に切れ込んだスリットの深い青色のドレス姿で、これまた大胆にも隆史の真横で、その長い脚を組んでいたのだ。女の整った顔が心なしに曇りを見せており、煙草を取り出す仕草に何だか迷いがうかがえた。パールピンクが薄く引かれた唇から、ゆったりと煙りを立ち上らせながらナホは意を決したように切り出していく。

「あのさ、隆史君。じぶんの携帯電話、ちゃんと管理してるの？」

「もちろん手の届くところに置いているけれど」

意外な質問だった。最近撮れた新しいフォト見せて、や、アタシも機種変更したんだ、などでなく「管理しているか」ときた。予想

だにしなかったことに、隆史は湧いて出てきた内部の煙りに揺らぎを覚えつつも、抑えて言葉を返す。

「なんだよ、急に。そっちに何かあったのか。——まさか、盗まれた、とか」

「冗談、アタシを誰だと思ってんの。夜に生きる女よ、身辺から体調管理まで用心しているんだから」

そう云い切ったナホは、少林寺拳法の有段者らしい。女の話は続いていく。

「まあ、アタシの事はあとに回して。——そんな事よりもさ、君は彼女さんにいったいどんな“騷”してんの」

「なんだよ、それ？」

「なんだよそれ、って……。まあ、いいや。——ええい、もう、極端に気を遣う仲じゃないから云わせてもらおうとね。——君の彼女さんね、アタシに電話かけてきたのよ」

「は？　どんな」

斜め上を行った恵美の行動に、隆史は目を見開いた。その男にチラリと視線を流したのちに、戻してから吸い殻を携帯灰皿へとこねくり回しながら、ナホが言葉を繋げてゆく。

「これからは隆史さんに電話もかけないでくだらない。と、彼からの電話にもメールにも応じないでください。……だってさ。——だいたい、こんな内容だったわ」

そして、軽い溜め息をついて。

「まあ、ね。彼の携帯履歴が気になるという気持ちには、アタシも解らないわけではないのよ。しかし、直接このアタシに電話してきて「ああするな、こうするな」と警告してくるっていうのは、さすがにどうかと思うのよね」

「他にも、なにかあったのか」

「いいえ、今のところはこれだけだけど。もしあるとしたら、君の履歴に載せている女の子たちじゃないかしら。さらに彼女さんから、アタシに同僚は居るか執拗に尋ねてきたわ。もちろん、その

質問には答えてあげなかったけれど」

ナホの語りに、隆史の中は大きな舵をきって揺れ始めていた。ついでに、なんだか顔にじんわりと脂汗も噴き出してきたようで。これで良かったのよねと心配を交えた表情を浮かべたナホが、もうひとつだけ付け加えた。

「今からまだ、そのお友達とハシゴする予定があるんだったら、おかかえのお店に行ってお気に入りの女の子を指名して話を訊いてみなさい」

「……分かったよ。そこまで心配してくれるなら、行ってみる」

ここまで気を遣ってくれているのが嬉しく思った隆史は、やってみる分には損はないかもなと頷いた。

やがて『クラブ 月光華』から出る前に、ナホから「なんだか少し疑っている感じがするから、証拠として、これ見せるね」と開けられた着信履歴に目を向けてみたら、女の指の差す番号に見覚えがあった。そして、自身の携帯電話の登録者と照らし合わせてみたら、間違いなく己の彼女であったのだ。そう、秋富士恵美の電話番号だった。

『星の娘』

二軒目。

こうした流れを経て、二軒目の『星の娘』という外国人がホステスをしているキャバクラに入っていた。ここで隆史の指名しているホステスは、源氏名をルルと云う中国人。この女は、店内で上位に食い込むほどの美貌とスレンダーな躰の持ち主。で、隆史はもちろん指名しようとして受付のボーイに頼んでみたところ、ルルはお休みだと云うではないか。これは参ったなと口を結んだのちに、そのボーイへと、ルルと仲の良い女の子をつけてほしいと頼んではみたものの、それは無理ですと跳ね返された。すると、店の奥から出てきたチーフがそのボーイに韓国語でひとつ強く吐きつけた途端に、顔色を変え足早と控え室に向かいヘルプの女の子を呼びにいく。このとき、チーフは「バカヤロ。あの兄さんは、あの子もお気に入りだぞ。希望どおりにミシェルをヘルプにつけて差し上げろ！」と怒鳴りつけていた。

そういうこともあって、恒昭と晴之に隆史は壁側の席に案内されて、それぞれのホステスがつくのを待っていたところ。三名が挨拶をして男たちの隣りへとついていく。

「初めまして、貴方がルルを指名しているお客様ね。――私、キヤンディと云います。よろしくね」

「よ、よろしく」

隆史を含めた男三人が息を飲むほどの愛らしさだった。源氏名をキヤンディ。黒く輝く瞳は大きく、健康的な浅黒い肌。セミロングの黒髪は、セットしたのか天然なのか、細かいパーマがかかっている。そして、隆史の印象に残ったのが、透明のグロスが引かれた薄い唇であった。キヤンディは隆史に、ブランデーかウイスキーかと尋ねたのちに後者をグラスに三割ほど注いで水で薄めたあとに、ど

うぞと渡した。それから、ホステスたちも一杯ずつ注文して配られて、皆で乾杯。

ひと言ふた言交わしたのち、隆史は決意して口を開いた。

「キャンディさん、ルルさんと知り合いなんだよね」

「ふふふ。知り合いどころか、私たちは寮で一緒に暮らしているもの」

「え？ そうなんだ」

「そうですよ。私よりあの子が少し年も身長も上だけれども、日本には同じくらい長く住んでいるわ」

「そうか、それは良かった。――じゃあ、ルルさんがお休みしているってのは、何で？」

「知りたいの」

先ほどまで微笑んでいたキャンディの顔が、ほんの一瞬だけ真面目なものに変わり、少し思案したのちに再び語り出していく。

「実は云うと、ルルはね、先週からずっと仕事に出ていないんだ。

いいえ、どちらかと云えば仕事に出れなくなってしまったの」

「どうして、また」

隆史はウィスキーをひと口入れて、こう尋ねた。そしてキャンディもカルピス酎ハイで喉を潤して答えてゆく。

「怪我させられたから。しかも、頬骨を折られて全治六週間。けれど、凶器なんかは“いっさい”も使われていないのよ」

「いったい、誰に……」

「貴方の彼女と名乗る女の人から強烈な一撃をお見舞いされたらしいわ。二人が会った時間は、昼間だそうよ。だからお酒なんて、鉢に一滴も入れていなかったんじゃないかしら」

「恵美が、ルルさんと呼び出して殴った……!？」

これは、考えもつかなかった。思いもしなかった。だいたい、隆史は恵美と付き合い始めた大学時代から同棲生活の現在に至るまで、己の彼女の素性を一切知らなかったからだ。そういえば、恵美は色白で木目の細かい肌をした、長身の女だった。けれど、百七〇に達

する身の丈でも、線の細いその躰つきからは運動をメインにしているといった生活などは、彼女からとてもじゃないが想像つかなかったのである。

それが、たった今、覆された。

拳一撃で相手を倒せる力を有していたとは。ひょっとして、恵美は幼い頃からこつこつと何かを積み重ねていたのか。いいや、だったらそれ、習い事というものになる。じゃあ、まさか、良いところのお嬢様だったりしないか。だいいち、何者なんだ？——そういう思考を巡らせていた中で、腕と躰の隙間に何かが絡んできた。

「ちよっと、深く考え込むのならば、二軒隣のゲーセンでね。そんな暗い顔をしていたら、うちのボーイたちに怪しまれるわよ」

「あ、ああ、そうだね」

腕を巻いたうえに微笑みかけてきたキャンディへと、隆史も礼を込めて微笑み返した。明るい世界に引き戻してくれて、ありがとうと。

やがて、時間も終わりに近づいてきたようで。キャンディは腕時計に目をやって、隆史にことを告げていく。

「そろそろ時間ね。延長はどうするの？——そう、もう帰るのね。この事を詳しく知りたいのだったら、直接ルルと逢って話を聞いてあげたほうが最良よ」

「どういう事だ」

「だって、あの子ね「隆史さんって、一回も食事に誘ってくれたことなんてないんだもの」って私に不満を漏らしていたくらいだから、逢ってあげなさい。一回くらいはお店の外で指名している女の子と顔を合わせてみるくらい、バチは当たらないわよ」

「ん？ それって同伴出勤でことか」

「そうとも云えるけれど、そうとは限らないわ。——それよりも……。貴方がこうして訊いてくれたお陰で、ルルの事を伝えることが出来て良かったと思っているわ」

これに対して、隆史は礼を述べた。そうして店から出るときのホステスたちからのお見送りの間際に、隆史はキャンディから引き止められたときに、誰の言伝で先ほど訊いてくれたのとの問いに男は、一秒から二秒の沈黙の後に『クラブ 月光華』のナホが俺に打ち明けてきて、まだ他にも被害に遭った女の子たちがいる筈だから一応訊きに行ってみなさいと促されたので先ずはここに来てみた、と答えたところ、この愛らしいタイ人ホステスは忽ち瞳と笑顔を輝かせた。

「『月光華』のナホさんって、まさか、菜穂姉さん。きゃーっ、こんなところで繋がるなんてー」

「意外だ。君たちと知り合いだったなんて……！」

「知り合いも何も、私たち二人はその菜穂姉さんとよく遊ぶ仲間なんです。仕事が終わってから明け方までや、お互いの都合がついた休みの日に会ったりして、けっこう付き合い長いから」

「そりゃすげえ」

そして、隆史たちは『星の娘』をあとにして、次の店へと向かった。

『フラワーパニック』

三軒目。

夜の世界もほど良く回ったところ、隆史たちは今夜最後に遊んで行く店として『フラワーパニック』という名の、ランジェリーパブへと入っていた。先の二軒よりも内部は暗く、照明もよりキラキラと輝き、回転していくミラーボールに反射して、まるでひとつの夜街みたいに店内を賑やかにさせていた。店じゅうに流れてゆく、英語が八割以上も入った“邦楽”がクラブ用にリミックスされて、さらに忙しくホップさを増していく。今は、ダンスタイムといったこの店の九〇分コースの中に組み込まれているサービスで、下着姿のホステスたちが客のソファアーに足を置いて、曲に合わせて腰をくねらせてゆく。それも、指名されてついた客だけではなく、入れ替わり立ち替わりといったかたちで横に流れて一周するもの。そして、音楽がムード系に変わったら、それぞれのホステスは各々の客に跨がってディープキスをしたりしていく。ここは、このようにちょっとした過激なサービスで売り出していたパブであった。

源氏名をサユリという水色のレース柄の上下インナー姿をしたホステスが、正面に跨がった男の首に腕を絡めて鼻が触れ合う手前までに顔を近寄せると、軽く微笑みを見せたのちに語り出した。

「隆史。随分、久しぶりじゃない。でも今日はなんだか、お楽しみに来たのと、あたしに訊きたいことがあってきたのとの半分はほんみたいだね」

ピッチの細かいかつ緩めにカールした腰までの茶髪を、ハーフアップにしていたサユリは、整ったその細目の狐顔を意味深な笑みに変えた。これに返答しようとした隆史の唇を、女は塞いで、その奥へと舌を入れ込んでゆく。やがて音楽も鳴りやんだところで、顔を離したサユリは男の隣りに座り直した。この女もやや身長が高く、

恵美よりも少しだけ低いくらい。長い脚を組みつつ、隆史の肩に腕を伸ばしてそのスレンダーな体を密着させるなりに、水割り焼酎のグラス片手にしたところで、再び口を開いていった。

「で、訊きたいことって何」

「それが、その」

「――ゴメン。実はあたし解っていたんだ。恵美さんの事についてだよ」

「え？　な、なんでそれを」

まだ、彼女の名前など出していないというのに。

「だって、その子と直接会ったもの。……つか、呼び出されたの」「き、君も……」

「あら？　その分じゃ、他のお店の女の子たちも呼び出されたみたいね。まあ、それは置いといて。――さらに云うとき、恵美さんとアタシは高校の頃と同級生なんだ。――彼女さんの同級生って、こうして初めて見るでしょ」

「ああ」

「それもそうだけれど、あたしが呼び出されたのは五日前。家で昼ご飯いただいたいたら、ケータイが鳴ったのよ。最初はお客様からだと思ったけれど、知らない番号だったんで用心深く出てみたわ。そうしたら、何処かで聞いたような声だったから、奇妙ねと思いつながら相手の話を聞いていたら隆史の名前を出してきたじゃない。

――だからこれは何か面倒なことに成りそうよねと考えながらも、電話から入ってくる言葉を流して、その日はこれでおさめようとしていた時だったかな」

ここまでの喋りを一旦区切ったサユリが、焼酎を注ぎ込んだのちに、再び語り出した。このときに、グラスの水が“から”と動いて崩れる。

「恵美さん、電話口で何云ったと思う？――」お電話じゃ、どうしても意志の疎通に弊害があります。だから、明日に改めてお会い致しましょう」――ときた。いやあ、何度か丁重に断ってみたんだけど

れども、あつちはあまりにも“しつこく”お会いしようとして押してくるものだから、あたしの方が折れてその翌日にじゃあ会ってみようじゃないと出向いてみたわ。――でね。実際会ってみたらみただ、あたしもあちらも息を飲み込んだくらいに一瞬驚いたわ。だって、高校の時に同じクラスメートだった人が、目の前に立っていたんだもの。いやーあ、まいったね。どーやって切り出していいものか、お互い口をつぐんだままだったからさ」

「それで？」

ひとつ訊いた隆史は、ウィスキーで喉を潤す。サユリも焼酎をひと口入れて言葉を繋げていった。

「それでね、あたしから立ち話もなんだからどこかでお茶を飲みながらお話しましょうと誘って、電車通りの喫茶店に入ったの。二人でランチセットをいただきながら、貴女あたしにいったい何の用かしらって切り出したみたんだ。すると恵美さん、こう返してきたの」

サユリは3分の1ほど液を残したグラスを硝子テーブルに置いたその手を、組んでいた膝に乗せるなりに、語りを続けていく。

「――隆史さんが貴女のお店に行く分については、私は何も云わないわ。ただし、貴女からの電話や、隆史さんからの電話などのやり取りを、いっさいなさらないでほしいの。もし、私のこの忠告を無視した場合、貴女そのものに保証などは持てませんわ」――だってさ。――これって、あなたの命に関わりますよと遠回しで脅していない？」

「そりゃあ、な。いくらなんでも云いすぎだわな」

「もちろん、いっかいの風俗嬢を相手に私の彼に手を出したらぶっ殺しますわよっつって云いすぎだけれど。その反対に、ちょっとだけ安堵した感じも見せていたわ。――多分、あたしが恵美の同級生だったからじゃないかな。この人ならば、私の彼に線引きをしてくれる。と、顔に出ていたわね」

「どうしてそこまで解るんだよ」

「どうしてって、そりゃ貴方。あたしは、恵美が高校生の時の唯一の友達だったから。彼女の素性を受け入れて、三年生の卒業まで付き合っていたもの」

「いろいろと衝撃的だなー」

その感嘆通りに、隆史の顔は驚きの中に心なしか呆れていたのも交えていた。

「で。けっきょくはどうなったんだ。……殴られそうになった、とか」

「は？ なに云ってんの。あたしの顔見れば分かるでしょ。傷ひとつ無いじゃない。——でもまあ、確かにあの日は恵美の前で掌を見せながら誓ったけれども、また“忘れた頃に”にでも隆史に電話入れたりしてね」

「ちよっと待った！」

「じょーだん冗談。——でも、なんだか寂しくなっちゃうなー。

……大事な“金づる”がひとり減ってしまうなんて」

「だったら、さ。時間いっぱい一杯まで、こーしていようか」

「お？」

嬉しさを含めた驚き顔を見せたサユリの横で、隆史がその肩に腕を伸ばしてきて、さらに牀が密着。かたち的には、お互い肩を組んでいる姿そのものであった。

それから深夜も二時をさしかかった頃には、隆史たち男三人は『フラワーパニック』を出て、各々の家路へと向かっていた。浜の町の電車通りで信号待ちをしていたときに、隆史は“ふと”出た記憶を引っ張り出そうと試みてみたが、上手く行かず。これも、アルコールを牀に入れたせいかもしれない。

——なんか、大事なことを知れたかったんだが。まあ、いいか。——

予兆

週明け、数日後の深夜。

隆史は会社からそのまま帰宅して、いつものように恵美と一緒に晩御飯をとり、ともに布団の中で心と躰を交わしていた。

のだが。

ちよつと変化が訪れていた。

それは、隆史の側で。

小さく呻きながら互いに痙攣を起こした数秒のうちに、二人は躰を離してそれぞれ天井を仰いでこのまま眠りに入り込んでゆきたいのを後回しにして、『後始末』をしてゆく。本来、この後始末は“恵美の方”がしていたのだが、ここ数日間“隆史の方に取って代わっていた”のである。おもむろに、彼のを数枚のティッシュで労るようにその細く白いで包んでいきながら、被せていた物を外して繰るんでゴミ箱とやる。

それから、いままでは事後も一緒にお湯を浴びていたが、今日に限って隆史の方から別々にしたいと頼んできたものだから、彼女はその場は素直に従った。よって今は、浴室にと己の躰に残る彼の僅かな匂いを噛みしめつつも、同時に、突然どこからともなく湧いてきた寂しさを覚えていきながら、恵美は巡らせてゆく。

――隆史さんったら、どうして急にゴムを着けるようになったのかしら……？　今までは有り得なかったのに。――私、貴男といたいどう向き合えばいいの？――

極めて薄皮一枚といえども、何かしら隔てられてしまったといった、自身の勘に訴えてくるこの複雑な気持ちという悪性腫瘍のような芽が生えてくる進行は止めようがなかった。だが、恵美を求めてくるのは以前と変わらぬ週三回から四回で、営みは三度。別に抱かれる回数で愛情を“はかって”いるわけではない。しかし、歓楽街

から朝帰りをしたその週明けを境に、隆史が彼女へと突然「ゴムを着けよう」と云い出した。と同時に、なんだか恵美を見る顔が、少し警戒を含んでいたのが察知できたのだ。

そして、若干憂鬱なものを抱えながらシャワーの蛇口へと手を伸ばしたとき、ツウと内腿から爪先にかけて落ちてゆく赤い筋を見るなりに、恵美は口を結んだ。

未だ“月のもの”がきていたことに。

変化

1

さらに、翌週末の昼間。

恵美はいつものように隆史との同棲先にて、全自動洗濯機のドラムへと洗濯物を入れていたときのこと。彼のスラックスにある異物を取り出して確かめてみたら『ハッスルパブ ドリームナイト』と、ロゴがデザインされたマッチ箱が。この「ハッスル」とい言葉に眉をひそめてみたものの、いまいち脳内で繋がらず。だがしかし、証拠物件として一応は押収した。

そして翌週を迎えた昼休み。

地道で過酷な事務処理にひと区切りつけた恵美は、会社の屋上のベンチにて同僚と弁当を開いていた。少し明るめる茶髪のこの同僚は、あしかりつたこ芦刈 薫子という、ちょっとハスキーヴォイス入った可愛い声が特徴的な女。いつものごとく弁当の具を突つつきながら、歓談していた中で、思い詰めた顔をした恵美が、スカートのポケットから例のマッチ箱を取り出して隣りの同僚に「話しの途中にごめんね」と切り出して見せた。ひと言ふた言尋ねたあとに、薫子は「このお店、知ってる」と驚き混じりに声を抑えると、次は二人の間でしか聞き取れないような音量で説明していった。

この『ハッスルパブ ドリームナイト』という所は、ホステスが上半身裸になるといった過激なサービスで有名な飲食店。もちろん、過激なサービスなのはトップレスだけではない。どうしてその店の内容を知っているのかと、恵美に訊かれた薫子が、こう答えていく。
なにやら不快な思い出があるようで、少しばかりムツとしていた。
「あきこ晟君（薫子の彼氏）のヤツ、そのお店の女の子とアフターで寝ちゃったんだよ」

「まあ……！」息を呑む。

「当然こつぴどく叱りつけたんだけど、やっぱりなにか一方的で可哀想な気がしちゃってね。あとから美都子に詳しいこと聞いてみたのよ」

「ちよつと失礼。――その、美都子さんという方は？」

「あたしの親友。そのお店の隣りのラウンジで働いていてね、そのドリームナイトってところのほとんどの女の子たちって“寝て”客を繋いでいるんだってさ。――これ知ったとき、あたしバリ頭にきてね」

「解る。それ……」

この時、恵美の奥底で、粘度の高い『ほとんど黒』の物質がその相槌に反応をしたかのように、独りでに蠢き始めていった。恵美自身も気づかないほどに、静かに、ひっそりと。

「ありがとう、お店の概要は解ったわ。――で、私が知りたい事の本命なんだけれど。……この番号の女の子について何か、知らないかしら」

適当なところだと判断した恵美が、一枚の紙と写メールとを薦子に見せてみた途端に、女は「あ！」と声をあげて「そうそう、この子この子」と指差してゆく。

「驚いたー。どうやって手に入れたのさ」

至極当然な疑問。

「うふ、ふ。薦子さん、いろんな“つて”が有ればどうにでもなるものよ。――それより。この子と隆史さんが一緒にいたところ分かるかしら」

意味ありげに含み笑いを乗せたのちに、確実な情報を得ようとするに喰いついてみる。

「聞いた聞いた。いつも金曜に、貴女の彼氏さんとお店から出て行くところを美都子が見たって」

「ありがとう薦子さん。御陰様で助かったわ」

「いいえ、お構いなく。あたし、恵美のためになるなら喜んで協力するよ。――それよりも、このあと彼氏さんをちゃんと叱らない

といけないよね」

「そうね、ちゃんと会ってお話ししないといけないから。……うふ、ふ……」

そう恵美は、携帯電話の画面に写し出された、隆史と手を繋いでいる黒髪セミロングの女を見つめながら、こう呟いていった。

それから一週間後の夕方。

とあるパチンコ屋の立体駐車場の四階にて、うすだみぎえ白田幹江という黒髪セミロングの女がひとり、自家用の白いビッツから出てきて『47』と記された太く四角い柱まで歩き立ち止まった。

すると今度は、深い青緑のランボルギーニが幹江を横切った先で、引つ掻くような高い音を“わざと”鳴らして急停車すると中から秋富士恵美が姿を現して、近づいてゆく。

実に二人の身なりは対照的であった。幹江は、柄の入ったワンピースと膝までのロングブーツ。対して恵美はというと、白いブラウスのワンピースに茶色の革ベルトとローヒール。そして、そんな恵美が笑顔を見せながらも大股気味で寄ってくるなりに、幹江の頬へと拳を喰らわせた。

挨拶も無しに恵美からのカウンターパンチを受けて、後ろの柱に打ちつけたのち間髪を入れずに胸倉を掴まえられて、その隣りの車のボンネットへと叩きつけられた。一時的な呼吸困難から咳き込む幹江を睨みつけながら、恵美がポケットから携帯電話を取り出して例の写メールを見せつける。目をつり上げた幹江からの「なにしやる！ クソが！！」との罵声を流して、胸元を片腕で押さえつけていく。

「いきなりでごめんなさいね。——この写真にいる隆史さんの隣りにいる女、間違い無く『ハッスルパブ ドリームナイト』の“ツグミちゃん”こと、白田幹江さん貴女でよろしいかしら」

「ああ？ ああ、間違いなく私だよ。てか何だよ！ 私が誰と寝よ

うがアンタにゃ関係ねーだろ。イイ男とやりたいと思って、なにがいけないのさ！」

無言でいる恵美を見ながら、幹江は目許を嘲りに歪ませて、言葉を突きつけていく。

「ひょっとしてアンタ……、私から彼氏を寝取られたのが頭に来てんの？ マジ……？」

直後、今度はフロントガラスをめがけて投げつけられてしまい、床に転げ落ちた。その際に強打した腰をさすりつつ、咳き込んでいたのちに恵美を強く目線を送った。それから、車と車との間で尻餅を突いている幹江にへと、携帯電話の画像を次々に見せてゆく。

「うふ、ふ。隆史さんが貴女から寝取られた、ですって……？ 私
が貴女ごときに頭にきていますですって……？ 売女ばいたが口きいてんじやないよ！！——そうそう、これ。この写真なんだけど。貴女って、商売道具の分際で“何にもせず”隆史さんのをくわえ込んで
いるわけ？ どうして貴女が“特別扱い”されているのかしら？——うふ、ふ。どうやら、今、御自分がどんな立場に置かれてしまったのかがお解りになっていないらしいわ」

「ちょ、ちよっとアンタ。なに云って——！！！」

幹江が皆まで云おうとした瞬間に、恵美の踵で顔を蹴られた。鼻柱を折られて赤い筋を垂らしていき、口元を覆ってのたうち回る。襟足を掴みあげられて、進路帯に投げ出された矢先に、恵美の爪先が数発も腹に集中放火していく。ときには、思い出したように横顔を力いっぱい踏みつけて、幹江の腹と腰とに蹴りを喰らわしていき、やがて、とうとう気力が失いかけたところを見計らったのちに、恵美は再びランボルギーニへと乗り込んでパチンコ屋の立体駐車場を後にした。

あれから翌日。

恵美と朝食をとっていたときのこと、隆史はテレビの液晶画面に写し出されていたものと流されてゆく音声に、思わず箸を止めた。

それは、昨晚、赤迫付近のパチンコ店の立体駐車場四階にて、飲食店従業員の白田幹江へ二十三歳が暴行を受けた後の重体で発見されたからである。幸いにも、意識を僅かながらに保っていたので、回復までに短くて半年、長くて一年と判断された。現場に残されていたのは、短めなタイヤ痕と監視カメラのみ。これだけ証拠を残していれば充分であったが、どうしたことか捜査は難航していた。しかしながら、ニュースを観ていた隆史は、じぶんが指名していた“ツグミ”という女が命に別状はないと知るなりに安堵しつつも、目の前でお膳を挟んで味噌汁を啜ってゆく恵美にへと“ふと”顔を向けた。すると彼女は、そんな彼氏の視線に気がついたのか、お椀を静かに置いたのちに微笑みかけていく。

恵美は、相変わらず衰え知らずな美しさである。このような敷石の高い女と、よくもまあ長く同棲生活が続いているものだと、隆史は我ながら感嘆していく。

そんな中。

「女のひとり歩きって、危ないわね」

と、こう唐突に切り出した恵美の口元は、気のせいかもしれないが、僅かばかりに歪んでいたようだ。気のせいかもしれないが。いや、そうではない。以前、彼女には外国人ホステスを殴りつけたといった話を聞いたではないか。これを思い出した途端に、隆史の中で嵐の前触れに吹くような風が駆け抜けていった。そのような彼の心情を知ってか知らずか。いや、恵美は明らかに隆史の顔を伺いながらも心なしかこの時を楽しんでいるようである。たとえば、この女自身に自覚がなくとも。

「いったいどんな“飲食店”に勤めていたから知らないけれど、何かと痛い目を見るような事を仕出かしたんじゃないかしら……。幹江さんって方」

「おいおい、あくまでも被害者だぞ。貶めるような云い方はやめてくれよ」

いろいろと痛いところを突かれた気がした隆史が、これ以上悪化が進行しそうな彼女の言葉を制した。
すると。

「貴男の身の回りは、私が綺麗にしてあげるように努力するわ。だから、考えていてね。——私、隆史さんの返事、待っているから……」

不意打ち。

箸が止まるとは、この事であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166k/>

MAD LOVE IN MIDNIGHT

2011年3月24日11時25分発行